

生活

旬のやさしい 青梗菜えんぎさい
 中国では三千年前から食されていましたが、日本で広まったのは一九八〇年代になってから。

くらしのこよみ
 うつくしいくらしかた研究所

◎ 東京新聞

● 脳の中の地図

認知症の症状の中に、今自分のいる場所がわからなくなってしまうことがあります。ある場所に行こうとしても道に迷ったり、辺りをさまよったりするのです。丁子さんは、同じく認知症を患



Dr.松井英男の

在宅医療のカルテ

などを二次元の中ですばやく認識し、次の行動につなげるという働きです。昔行った場所への道順を思い出す場合など、過去の記憶が

認知症で損なわれる

必要になることもあります。このような機能は、脳の「海馬」というところの特定の細胞の働きにより初めて可能になること

今、自分がどこにいるかを判断するには「空間認識」という脳の高度な機能が必要とされます。周囲にあるものの位置や方向、距離

う姉と二人暮らし。ある日、川崎市の実家から外出して数日間行方がわからなくなりました。幸い、新宿で警察に保護され、自宅に戻ることができましたが、途中、転倒もしたらしく、足は傷だらけでした。このように、認知症などによる徘徊で行方不明となる方は、年間一万人にも上るといわれています。



往診でも活躍するGPS

が解明されました。ヒトは脳の中に独自のGPSをもっているといえます。二〇一四年度のノーベル医学・生理学賞は、この「場所を認識する細胞」の存在を明らかにした英国とノルウェーの研究者に贈られました。

認知症では、海馬の萎縮が起ることが知られており、それに伴って記憶や「自分がどこにいるのか」を認識する機能が損なわれると考えられています。逆に、車の道順をすべて頭に入れていられるドライバーのタクシー運転手の海馬は、通常の人に比べて大きいこともわかっています。神秘的な脳の働きが解明され、認知症の治療に結びつくような発見がなされる日もそう遠くはないはずです。

(川崎高津診療所院長)
 次回は十一月四日掲載